

博物館を活用した国語（現代文）の授業 — 歴博と学ぶ、山川方夫「夏の葬列」 —

桐光学園中学校・高等学校 小関 瑠奈

1 実施学年及び教科・領域

中学校第2学年 国語（現代文）

2 学習のねらいと博物館活用との関連について

(1) 単元名

小説 山川方夫「夏の葬列」（使用教科書：「伝え合う言葉 中学国語2」教育出版）

(2) ねらい

①学習指導要領との関連

中学学習指導要領総則（平成29年告示）の第一章・総則では、「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また、地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。」と、博物館をはじめ、学校外の施設や資料を活用した活動・情報収集が求められている。

②単元の目標

- ・目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈する。
- ・観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考える。

(3) 博物館との関連

①活用方法：「非来館型活用」

②活用資料：本実践で使用した資料は下記の通りである。展示室の展示を事前に写真撮影したものを用いたほか、「館蔵資料データベース」の写真を利用した。3時限目は国立歴史民俗博物館副館長の山田慎也教授に、第四展示室「IV 死と向き合う」のブースの葬列の再現展示資料を中心に展示解説をしていただき、ミュージアムトークをしていただいた。

第四展示室

- ・葬列写真（再現展示の背景に使用されているもの）
- ・葬列の再現展示

第六展示室

- ・戦時生活人生画訓【資料番号：H-965-152】
- ・戦争ポスター「国民総決起」【資料番号：H-966-43】
- ・終戦直後の闇市の様子



葬列写真と再現展示

- ・「終戦直後の学校給食」写真
- ・「1950年代の学校給食」写真
- ・「1960年代の学校給食」写真
- ・「日本住宅公団団地実物大再現」写真
- ・「1964年東京オリンピックポスター」写真

館蔵資料データベース

- ・テレビ（日立・昭和30年代）【資料番号：H-686-35-107】

（4）指導観

山川方夫の「夏の葬列」は、1962年『ヒッチコックマガジン』8月号に「親しい友人たちその7」として発表された短編小説である¹。物語は太平洋戦争の終戦から十数年後、サラリーマンである主人公が戦時中に疎開していた町を訪れ、そこで葬列と出会う場面から始まる。終戦直前の真夏のある日、当時小学3年生の主人公と2歳年上の「ヒロ子さん」は葬列を見かけ、それに駆け寄ろうとしたところに艦載機がやって来て、主人公は自分を助けようとした「ヒロ子さん」を銃撃の下に突き飛ばしてしまった。その罪の記憶を封印するために、疎開先の町を訪れたのである。「あの夏」と同じような葬列に出会い、棺の上に置かれた遺影を見て、一旦は「ヒロ子さん」が最近まで生きていたと思い込み、自分に「ヒロ子さん」の死の責任はなかったのだと主人公は幸福感に浸る。しかしその葬列が「ヒロ子さん」の母のものであることを知り、主人公は、「ヒロ子さん」とその母の「二つの死」の責任と罪の意識を背負いつつ生きていくことを自分の宿命として認識するのである。

この物語は時間の経過に従って物語が展開するのではなく、現在と過去の回想が繰り返されることによって物語の結末が印象的になっている。加えて、比喩や情景描写が独特の世界観を生み出しており、その意味や効果を考えさせる学習に適していると考えられる。

したがって本単元では、「作品の展開や表現の効果について考えを深めること」「主人公の心情の変化や言動の意味を考え、作品を解釈すること」「儀礼の変化から現代社会を見つめ直すこと」を中心的な学習活動とし、歴博資料や歴博教員によるミュージアムトークを取り入れる。物語の舞台は1960年代の高度経済成長期、回想場面は1945年であり、作品を読み、解釈するうえでそれぞれの時代背景を理解することは必要不可欠であろう。また、第六展示室の展示は、戦中から高度経済成長期を生き延びた人々の生活や時代の変化を知るために効果的であると考えられる。物語全体において重要なキーワードとなる「葬列」は、生徒たちにとっておそらくなじみが薄いものであるが、主人公の心情の変化やそのきっかけを読み取ったり、作者の表現上の工夫を読み取ったりするうえで重要な手掛かりとなるはずである。そのため本実践では、単元の導入に「ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ²（以下、VTS）」の手法を用いて「葬列写真」の鑑賞を行った。物語の中で「葬列」に初めて出会

¹ 「伝え合う言葉 中学国語2」では、『山川方夫全集 第四巻』（1969年）所収のものを出典としている。

² 作品の鑑賞を通して学習者に、観察、解釈、根拠を持った考察、意見の再検討などの複合的能力を鑑賞能力に加えて育成しようとする教育方法。VTSは、「①この作品の中でどんな出来事が起きているのか」「②作品のどこからそう思ったか」「③もっと発見はあるか」の3つの問いかけが核になる。アート鑑賞のみならず、他教科にも応用可能であり、多様な実践が行われている。

った主人公と同様の体験をすることで「葬列」に対する興味関心を高めたい。オンラインで歴博と教室とを繋ぎ歴博教員によるミュージアムトークを行い、第四展示室の葬列の再現展示を中心に展示解説をしていただくことで、葬送儀礼としての「葬列」について知るだけでなく、作品の中で「葬列」が持つ意味について考えさせた。さらに、過去に学んだ作品や社会科歴史分野で学んだ内容と関連付けることにより、単元や教科の枠を越えた縦断的・横断的学習を試みた。

戦後数十年経っても多くの人の心に翳を落とす戦争の悲惨さや理不尽さ、「ヒロ子さん」とその母の「二つの死」の原因を作ってしまった主人公の行動に対する是非や今後の生き方を考えることに留まらず、戦中・戦後を生きた人々の生活の様子や、通過儀礼に込められた思いとその変化について、自分なりの考えを持つことができるよう指導した。また、様々な資料やミュージアムトークを通して、博物館そのものに対する興味関心を育成し、今後の積極的な利用や主体的な活用に繋げたい。

3 指導計画（7時間扱い）※網掛け部分は博物館資料を用いて授業を行った時間である。

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
第1次	1	<p style="text-align: center;">物語のあらすじを掴み、展開を整理する。</p> <p>○「葬列写真」を鑑賞する。 ○本文を通読する。 ●物語のあらすじを掴む。 ●「語り手」を確認する。 ○物語の展開を整理する。 ●5つの場面で構成され、「現在」と「過去の回想」を繰り返していることを理解する。</p> <p>【課題】 ○初読の感想・疑問点を書く。 ○語句の意味調べを行う。</p>	<p>■場面の切り替わりの箇所と「現在」が1960年代、「過去の回想」が終戦直前（＝1945年の夏）であることを読み取ることができている。</p> <p>■自分の言葉である程度まとまった量の文章を書けている。</p>
第2次	2	<p style="text-align: center;">物語の時代背景を理解する。</p> <p>○年表やこれまでに学習した内容・作品から、戦時中の人々の暮らしと、現在の主人公が置かれている状況、物語の舞台となった時代を理解する。 ○回想部分の時代から物語の中の「現在」にかけて、人々の暮らしがどのように変化したのかを</p>	<p>■複数の資料やこれまでの学習内容から必要な情報を収取し、わかりやすくまとめることができ</p>

		<p>まとめる。</p> <p>○第二場面で、主人公と「ヒロ子さん」が「葬列」を追いかけた理由を読み取る。</p> <p>→おまんじゅうをもらいに行こうと思った。</p>	<p>る。</p> <p>□これまでに学習した作品や他教科で学んだことと関連付けながら、主人公と「ヒロ子さん」の行動の理由を考えられるようにする。</p> <p>例) 米倉斉加年「大人になれなかった弟たちに……」</p> <p>→食べ物、特に甘いものは「ぜんぜんなかった」</p>
	3	<p style="text-align: center;">「葬列」について理解を深める。</p> <p>○歴博教員によるミュージアムトークに参加する。</p> <p>●「葬列」がどのようなものか、高度経済成長期に通過儀礼が簡略化されたことを確認する。</p> <p>○第二場面で、主人公と「ヒロ子さん」が「葬列」を追いかけた場面を振り返る。</p> <p>●2人の葬列の捉え方を読み取る。</p> <p>●本文中の「葬列」の特異性について考える。</p> <p>【課題】</p> <p>○ミュージアムトークや資料から学んだことを1枚のプリントにまとめる。</p>	<p>□主人公と「ヒロ子さん」にとっては「葬列」が身近なものではなかった点³、当時の2人が置かれていた状況から、2人が「葬列」を本来の意図とは異なるものとして認識したことを理解できるようにする。</p> <p>■葬列や通過儀礼について、得られた情報を自分なりに整理することができている。</p>
第3次	4	<p style="text-align: center;">回想部分における主人公の「ヒロ子さん」への心情の変化を読み取る。</p> <p>○本文中の「ヒロ子さん」についての描写を確認する。</p> <p>●描写の変化から、主人公の「ヒロ子さん」に対する認識の変化を読み取る。</p>	<p>□主人公の心理状態に注目させる。</p>

³ 東京においては、明治末までは葬列を組んでの葬送を中心とした葬儀が行われてきたが、大正期になると葬列は行われなくなり告別式を中心としたものに変化している（村上1990）。したがって東京から疎開してきた主人公と「ヒロ子さん」にとっても、葬列は身近なものではなかったと言える。

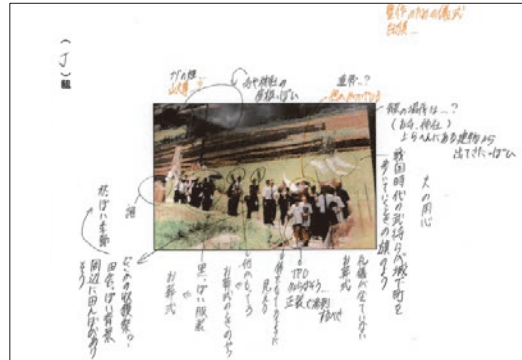
		<p>○主人公が「全身の力でヒロ子さんを突き飛ばした」理由を読み取る。</p> <p>●主人公の言動の理由を明らかにする。</p>	<p>□「ヒロ子さん」の言動の理由にも生徒が目を向けられるようにする。</p> <p>■登場人物の言動の理由を考え、心情の変化を捉えることができている。</p>
	5	<p>ヒロ子さんの死に対する主人公の心情の変化を読み取る。</p> <p>○「ある予感」とは何かを読み取る。</p> <p>●主人公が長年抱えてきた罪の意識から解放され、高揚感に浸っていることを確認する。</p> <p>○「よけいな質問」から何が分かったのか、それをどのように受け止めたのかを整理する。</p> <p>●主人公の心情の変化を読み取る。</p> <p>○第四場面での心情の変化を説明する。</p>	<p>□主人公が「よけいな質問」をしてしまった心理に注目させる。</p> <p>■主人公の心情の変化とその原因を読み取り、説明することができている。</p>
第4次	6	<p>物語の表現の工夫の効果を考える。</p> <p>○人称代名詞や比喻表現、文章の構成などの表現の工夫に注目し、その効果を考える。</p> <p>●主人公の人称の使い分けの効果を考える。</p>	<p>■特徴的な表現について、その効果を考えることができている。</p>
第5次	7	<p>学習のまとめと振り返りを行う。</p> <p>●儀礼としての「葬列」と本文中の「葬列」の意味を比較する。</p> <p>○主人公にとって「夏」がどのような意味を持つのかを読み取る。</p> <p>○今後の主人公の生き方について考え、意見を交換する。</p> <p>○学習後の感想を書く。</p>	<p>□これまでの学習内容と関連付けられるようにする。</p> <p>□時間の流れに沿って考察させる。</p> <p>■本文中の描写や資料を根拠に挙げながら、自分の考えを文章にすることができている。</p>

4 実践の概要

本実践は、報告者の所属校である桐光学園中学校2年J組⁴（在籍40名）を対象に、2022年10月17日から11月2日にかけて行った。ここでは、博物館資料を活用した1・2時限目、ミュージアムトークを実施した3時限目について述べる。

【1時限目】単元の導入：写真から何が起きているのか考える（10月17日実施）

単元の導入として、はじめに「葬列写真」を鑑賞し、VTSの手順に則って「写真の中でどんな出来事が起きているのか」を生徒たちに考えさせ、写真の中の根拠となる部分に印をつけさせたうえでワークシート（資料1）に記入させた。その後、クラス全体での意見共有を行い、さらに発見はあるかを尋ねた。



右：資料1 生徒のワークシートの一例

※個人が特定されうる情報には加工を施している。

生徒たちがワークシートに記入した内容を分類すると⁵、

- ・葬送儀礼（22人）…白と黒の色の服を着ている/お坊さんのような人がいる/寺や神社の屋根のようなものが見える など
- ・豊作を願う/感謝する儀式（19人）…稲が束ねてあるの見える/お供えものを持っている人がいる など
- ・儀式（6人）…先頭の人が持っている白いものが、神社の人がお祓いの時に持っているものに見える など
- ・祭り（6人）…お祭りのときには、写真のように何か持ち物を持っていたり列を作って歩いたりするから など
- ・七夕（3人）…写真左に、七夕の時に飾る短冊のようなものがついた笹のようなものを持つ人がいるから など
- ・降伏（2人）…白い旗を持って歩いている人たちがいる（戦争の時には、白旗を振って降伏したと聞いたことがある）から など

のような意見が出された。このほか、「神社の移動」「地域の見回り」「迷子を捜している」「観光」「火の用心の呼びかけ」「どんど焼き」などが挙げられた。

生徒のおよそ半数が何らかの葬送儀礼に関する写真である可能性を指摘してはいるが、「葬列」という言葉は見られなかった。さらに、資料1の生徒のように、豊作を願う/喜ぶ儀式なのではないかと考えている生徒も多く、生徒たちにとって「葬列」は馴染みのないものであることが改めて確認できたと言える。

【2時限目】物語の時代背景を理解する（10月18日実施）

第六展示室の資料を中心に、主人公が生まれたと考えられる1936年から物語中の「現在」である1960年代までの主な社会的な出来事を記載した年表を参考資料として作成した（資料2）。授業では主な出来事の際の主人公の年齢を年表に記入させ、主人公が日本が戦後か

⁴ 桐光学園は男女別制で、2年J組は女子生徒のみのクラスである。

⁵ ()内はのべ人数である。

ら高度経済成長期に向かう激動の時代を過ごしてきたことを把握できるよう意識した。

資料2 参考資料：1936年から1964年までの主な出来事

※黒塗りの資料は著作権上、本報告には掲載できない資料である。

西暦	主人公	夏
1936	0歳	「戦時生活人生画調」(1944)
1937		
1940		米や砂糖などが配給制に 太平洋戦争勃発、 小学校が国民学校となる。
1941		
1945		広島・長崎に原子爆弾投下 太平洋戦争終戦 学校給食の開始 下:終戦直後の学校給食 脱脂粉乳と トマトシチュー
1947		
1951		サンフランシスコ講和会議 平和条約の締結 テレビの本放送が始まる 映画「ゴジラ」の公開
1953		
1954		高度経済成長期が始まる
1955頃		
1956		日本が国際連合に加盟
1958		東京タワーが完成する 皇太子(平成天皇)、正田美智子さんと結婚 「ミッチーブーム」が最高潮に
1959		
1960		ベトナム戦争勃発 三重県で 四日市ぜんそくが発生 左:東京オリンピックポスター 下:1960年代から普及した 「公団住宅」の様子
1961		
1964		東京オリンピック開催

さらに国語便覧や歴史資料集等も活用しつつ、各自が興味を持った内容をさらに調べるなどし、1936年から1960年代までの人々の暮らしの変化をB5用紙1枚にまとめさせた。

資料3 生徒のワークシートの一例 ※個人が特定される情報には加工を施している。

夏の葬列 ワークシート② (J)組 ()番名前)

★参考資料や調べたことをもとに、回想部分の時代から物語の中の「今」にかけて、人々の暮らしがどのように変化したのかをまとめよう。

1945年 終戦
「回想シーン」

1950年 朝鮮戦争
1953年 経済百番
1956年 高度経済成長期突入
1961年 現在
1964年 東京オリンピック

終戦後の2~3年は、日本中がかって経験したことのない程の物不足の時代だった。国民は空襲で焼けた家の代わりに、バラックという臨時の家で住み、生死を繰り返した。その中、闇市が流行⇒闇市で買物生活。普通では買えない服も闇市で買えるようになった。朝鮮特需により生活が良くなった。

三種の神器登場!!
白黒テレビ 冷蔵庫 洗濯機

団地が人気

新三種の神器登場!!!
カラーテレビ クーラー 自家用車

夏の葬列 ワークシート②

(丁)組 () (番名前)

★参考資料や調べたことをもとに、回想部分の時代から物語の中の「今」にかけて、人々の暮らしがどのように変化したのかをまとめよう。



★一九四一〜一九四五

↓太平洋戦争(「復」は子どもの時)

衣・物置買・鉄・石油・めん・羊毛・木材などを
軍備に優先的にまわっていた。着物・もんぺ・軍服

住：国民のための物はほとんどなく苦しい生活

・木造建築・長屋・茶の間

食：米・みそ・しょうゆ・塩・小麦粉・食用油などは
一定の割合で配る配給制はきびしく制限になる

主にちまぶちのご飯・味噌汁

★一九四五〜一九七三

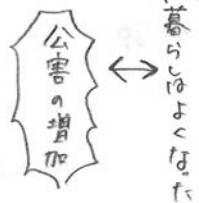
↓高度経済成長長期(「復」は大人の時)

衣：スーツ・ネクタイ・スカート

食：イテールでのパン・牛乳・インスタント食品

住：団地・マンション・リノベーション

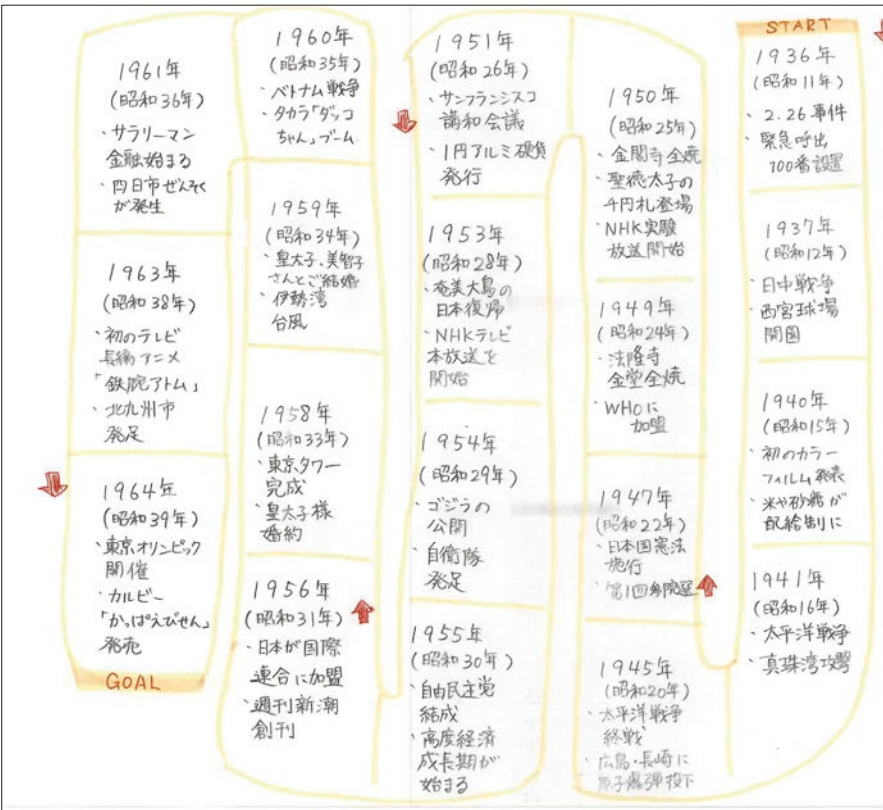
失業率の低下・日本の国際的な高評価



夏の葬列 ワークシート②

(丁)組 () (番名前)

★参考資料や調べたことをもとに、回想部分の時代から物語の中の「今」にかけて、人々の暮らしがどのように変化したのかをまとめよう。



生徒によって、着目した内容には違いが見られるとともに、まとめ方にも様々な工夫が見られた。

【3時限目】ミュージアムトーク：「葬列」について理解を深める（10月24日実施）

国立歴史民俗博物館の山田慎也教授に、オンライン上でZoomを用いて、第四展示室からミュージアムトークをしていただいた。教室のモニターにパソコンの画面を映し出すとともに、教室の前方と後方にカメラを設置し、教室の生徒たちの様子が歴博側にも伝わるようにした。

生徒たちには、「聞くこと」の学習にも繋がるよう記録用のワークシートを事前に配布し、メモを取りながら参加するよう促した。

（1）歴博について

生徒全員が歴博に行った経験がなかったことから、はじめに、歴博が日本の歴史や文化について研究し、その成果を研究論文だけでなく展示としても公開している、博物館を持った研究機関であるという説明をしていただいた。

（2）「葬列」について

葬列の再現展示を使用しながら、葬列が死者を自宅から葬式を行う墓地や寺まで運ぶものであると同時に、この世からあの世に向かって死者を送り出す意味を持つこと、役割によって、死者の死後の社会的な関係を改めて確認する機能があったことを学んだ。また、葬列が外に開かれた儀礼であったことから、「主人公が葬列に出くわす」という物語で最も重要な展開が可能であったことについてお話を伺った。

また主人公が生まれたころには東京では既に葬式は自宅で行われるようになっていたため葬列は行われなくなっていたこと、さらに1990年代には葬式は葬儀場で行われるようになり、開かれた儀礼であった葬式が閉ざされた儀礼になっていったという、葬送儀礼の変遷についても説明を受けた。

（3）葬式まんじゅうについて

葬式まんじゅうは元来、施行（せぎょう）であり、参列者全てに食べ物を配るという「よい行い」をすることで死者の供養になると言われていたそうで、単に葬式に参列したお礼としてではなく、むしろ主催する家が積極的に行っていたものであったようだ。子どもたちにとってはお菓子がもらえるため、葬式は楽しみにされていた面もあったことを、物語中の登場人物たちの言動に触れながらお話ししていただいた。

（4）現在の葬送儀礼について

現在葬式はほとんどが葬儀場で行われており、遺族ですら死者と対面するのは通夜や葬式の前後のみで、生活空間から死が切り離されていることを伺った。

（5）質疑応答

生徒からは、

- ・山田教授はどのような研究をしているのか
- ・焼きまんじゅうにはシダの葉が使われているという話があったが、他の菓子にも意味があるのか
- ・四本幡につけるお菓子の種類はどのようなものがあるのか
- ・「葬列写真」の子どもたちの服装が軽装なのはなぜか
- ・「葬列写真」の「花籠」について

など、積極的に質問が出された。2020年の新型コロナウイルス感染症の蔓延以降、葬式の際の会食が自粛されるようになるなど、最近の葬式の変化についてもお話を伺うことができた。

【5/13】
 自営おつや ↓
 葬式まんじゅうを配る
 ↓色んな種類があつて
 子かしてたらかき言いた
 ↓良い行ハ
 お供えもの
 お供えもの
 しゃげな銀色or金色の紙
 ていようてる
 班人もお供え
 お供えもの
 儀式
 この世
 あの世

★山田先生のお話を聞いてわかったことや感想、もっと知りたいことなどを
 書こう。

お供えものや食べ物、花などお葬式には多くの
 意味や思いが込められていることを知りました。当時、
 葬式まんじゅうを配ることは良い行いとされてたこと、
 まんじゅうには種類があり、お金がかかるため費用負担
 が大きかったことを知り、当時のお葬式は式を閉じた後
 でもいろいろ準備や負担があったんだなと思いまし
 ました。また、「夏の葬列」で子どもの頃の「彼」はまんじゅう
 がもたえろから喜んでいましたが、大人になった「彼」は死の残
 酷さに直面していた、という山田さんの話に子どもも大人で
 は、死への印象はだいぶ変わっていくのかしらと思いました。

生徒たちはこれまでも、生徒同士の1分間スピーチや5分程度の放送を聞くなど、「聞くこと」に焦点を当てた学習に取り組んできたが、今回のミュージアムトークは30分程度と、これまでの「聞くこと」の学習の集大成とも言える学習となった。資料4には葬列の再現展示や葬式写真についての解説の内容に加え、主人公が二度葬列に遭遇したことから「死の残酷さに直面」したと、物語の核心に触れるようなメモが見られ、生徒たちが物語の内容と関連付けながらミュージアムトークに参加できていたことが感じられた。

5 本実践の成果と課題

本実践は、現代文の授業で博物館資料を活用することにより、物語内で重要な役割を果たす「葬列」そのものに対する興味や理解を深めるとともに時代背景をより詳細に捉え、読解の手掛かりとしようとする試みであり、オンライン形式のミュージアムトークを軸に実践計画を組み立てた。

(1) 成果

単元の導入として行ったVTSの手法を用いた「葬列写真」の鑑賞によって生徒たちが「葬列」に対して興味関心を持つことができた点は、ミュージアムトークでの積極的に質問する姿勢などからも明らかだ。写真や絵で起こっていることを想像し、その根拠を問う手法は、根拠を的確に読み取ったり明確にして説明したりする力を育成する国語の学習内容と相性が良いと考える。また2時限目の参考資料から時代の変化を捉える学習においても、複数の資料を比較したり、他教科での学習内容も絡めながら、どのようなことが言えるのかを考えたり、自分なりに出来事と出来事とのつながりを説明しようとしたりする姿がみられたことに加え、提示した資料から自分が興味を持った事柄についてさらに調べ、情報を工夫しながら再構成することができていた。

したがって中央教育審議会答申において小・中学校の国語科の課題として指摘されている、「伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価する」(文部科学省 2019b) という課題に対しても、博物館資料の活用は有効なアプローチであったと言えるだろう。

また、単元の学習終了後、生徒たちに博物館資料を活用した効果について自由記述式で尋ねたところ、下記のような回答が得られた。

Q 様々な資料を利用したり、専門家の先生のお話を聞いたりしたことは、学習に役立ちましたか？

生徒たちの回答 (一部抜粋)

<役立った：92.5% (37人)>

- ・資料があったからこそ今ではなじみのない「葬列」のイメージがわかったからです。先生のお話を聞いたことで、文中に出てくる「葬式まんじゅう」が何なのかや、葬列の意味などを知ったことで、文がすんなり入ってきたからです。
- ・お葬式はいつか自分が体験することだから、常識として知っておくべきことだと思った。でも、このような機会がないと自分から調べたり考えたりしないと思うので、きっかけができてとても役に立った。
- ・資料などで時代背景を理解することで物語がより深く読めるようになった。
- ・葬儀について調べるのは怖いと思っていたので今まで触れることが無かったのですが、先生の話聞いて興味を持ちました。
- ・当時の人々の葬列に対する意識などが知れて、より物語に入り込むことができました。
- ・最初に読んだ時は、葬列の意味も子どもたちが楽しそうに葬列へ向かう意味も何もわかりませんでした。先生のお話を聞いてからもう一度物語を読んでも登場人物の言動の意味がより一層わかりました。

<役に立たなかった：2.5% (1名)>

- ・葬式の歴史を知識として知ることができた点はよかったと思うけど、テスト勉強の際にワークシートを振り返ったりはしなかったし、テストに出なかったから。

<無回答 (欠席)：5.0% (2名)>

結果として大部分の生徒が、博物館資料等を活用したことは学習に何らかの形で効果があったと感じていることがわかった。「役に立った」と答えた生徒の多くは「葬列」に触れており、本教材を学習する上で葬列について理解することが読解の手助けとなったと言えるだろう。

(2) 課題

本実践の課題として、資料の活用を、文章の内容を理解するための過程の一部として結びつける働きかけが不十分であった点が挙げられる。前述した学習終了後の振り返りにおいて、「役に立たなかった」と答えた生徒についても、「知識として知ることができた点はよかった」と、資料を活用したことについて肯定的に捉えてはいるものの、「テストに出なかった」と述べており、「何のために資料を活用したのか」が生徒の中で明確にできなかった部分があると言える。生徒の学習そのものや学習の成果に対する捉え方についても、さらなる分析が必要だと感じさせられた。

また、本実践では、登場人物の言動の意味などについて考え、内容を解釈したり、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えるといった活動を行ってきたが、資料や戦争に関する記述が強い衝撃や印象をもたらすがゆえに「戦争はしてはいけないと思った」「平和の大切さを知った」など、戦争の悲惨さにのみ意識が向いてしまい、物語の核心に触れられていないと感じられる感想も見受けられた。これは、国語科のみならず、戦争に関する教材を扱う教科に共通する課題になるのではないかと感じた。教材「を」学ぶのではなく、教材「で」学ぶことを前提に、どのような目標に向かってどういった学習を取り入れ、実践していくかを再度意識していきたい。

6 さいごに

歴博の博学連携研究事業はこれまで、社会科の授業を中心に実践が積み重ねられてきた。本実践では、歴博の資料を国語の授業の中で活用しようと試みたことに加え、活用される機会が比較的少なかった第四展示室の民俗学系資料を用いた点で、博学連携の新たな可能性を見出すことができたと考える。

国語では現代文/古典、文学的文章/説明的文章問わず、幅広い時代や話題を教材として扱う。様々な教材で博物館を利用した授業を展開できるだろう。

博学連携は博物館を学校活動に活かすだけでなく、博物館そのものに対する興味関心を深め、利用者を増やすことが重要だと考えている。だからこそ、通常のカリキュラムの中で博物館を利用した実践を行うことで、これまで博物館に行く経験がなかった生徒たちにも博物館利用の裾野を広げられるのではないかと考える。本実践が、今後の実践の一助となれば幸いである。

謝辞

本実践を計画・実施するにあたり、国立歴史民俗博物館の山田慎也先生をはじめとする先生方、広報サービス室学校対応の皆様、博学連携研究員の先生方には様々な場面でご指導・お力添えいただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

参考文献

- ・稲庭彩和子[編] (2022) 『こどもと大人のためのミュージアム思考』 左右社
- ・清野隆 (2002) 『『夏の葬列』の作品理解と教材の位置付けの歩み』 『語学文学 (40)』
- ・馬場重行 (2001) 『『夏の葬列』におけるショート・ショートの<力>』 『文学の力×教材の力』 教育出版
- ・フィリップ・ヤノウェン (2015) 『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』 淡交社
- ・村上興匡 (1990) 「大正期東京における葬送儀礼の変化と近代化」 『宗教研究 (64)』 日本宗教学会<編>
- ・文部科学省 (2019a) 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説―国語編―」 東洋館出版社
- ・文部科学省 (2019b) 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 総則」 東洋館出版社
- ・山田慎也 (2007) 「現代日本の死と葬儀―葬祭業の展開と死生観の変容―」 東京大学出版会

- 国立歴史民俗博物館「研究者紹介：山田慎也」（最終閲覧 2023 年 1 月 3 日）
https://www.rekihaku.ac.jp/research/researcher/yamada_shinya/index.html
- 国立歴史民俗博物館「館蔵資料データベース」（最終閲覧 2023 年 1 月 6 日）
https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/syuz2/db_param